

大学院斗争資料

1969 5・3 発行

1 闘争宣言

神学研究科学生会談

学友諸君!! 現在神学部大学院修士課程は、カリキュラム物碎きスロークラフにかけ、四月十日より登録申告を続行している。どうも私達はこの闘争が改良主義的な限界をもっていることは百も承知である。ミソした個別課題の追求と出発点としながら、闘争の展開過程において、最終的には現代の大学を構成している原理と体系との全面的な対決せざるを得ないことが、全国大学闘争の教訓である。即ち大学斗争は、現代の資本主義下の国家による大学支配の一形態たる巨大大協・私大協路線そのものへの真正面からの対決を必然化せしめる。

我々の提起している向いは、神学部の現行カリキュラムによって表現されていく「学内」の内表そのものに向けられていく側面と現行カリキュラムが同志社連帯に組み込まれている「教教会」によって最終決定されているという面の二面性をもっているものである。我々は向うの給付と近代合理的思考方式にみている。即ち近代合理的思考方式のつちには、急性的なメメントが欠けており、合理的思考を一度設定すると、それ自体を問い直す「思考」がない。これは近代合理的思考を担ったブルジョアジーがブルジョアとして自己を否定する思想を持ちえなかったことと対応する。従って、私達の個別カリキュラムの闘争は、その底に絶えずブルジョアジーとの対決を要請されるべきである。

我々の提議する今後の大学政策は、70年の国家独占資本主義的支配と体系的な力の養成を可能にする大学の「研究」「教育」と管理運営の構造と原理の確保にかかっている。そして、それは当然に教育体系の改革と見あわせた制度改革と教育過程の再編を含むものである。従ってブルジョアジーは現代、大学の全体的変革、原理的解明と全国大学斗争との結合を志向するものに対しては、国家権力のガバメントをかりて徹底的に弾圧せんとしているのである。

諸君!! 私達神学部院生は、同志社連帯精神の支柱といわれてきた神学部を弾圧し、カリキュラム撤廃斗争を展開する。そして昨年来様々な収拾策を「安泰」を誇っている同志社の腐敗を指摘する。悪臭の根源たる同志社体制とその体制を支える現行カリキュラムを解体することなしには、もはや同志社における知性の復権はないのだ!!

現行カリキュラム制度撤廃!!

幻想的文化共同体としての大学を解体せよ!

44.426

論戦I

序カリキュラム全般及び教化学についての視座(案)

大友 鶴山英夫
個別カリキュラム及び教化学(特講)に対する我々の取組みは一応主体的には64~65の此着巻・神学部斗争の批判的統括をもって始めなければならぬが、更に其後の神学部斗争の学部問題の処理如何の現状(奨学生、編入生、人専初等)とと際の上、検討される必要がある。教化学については個別院での昨今の授業内容の向題提起を基として取りあがる必要があるがカリキュラム全般の視座の下では、更に実践神学部内の内縁として見なければならず、これについては後述する。

理想的に66~67年以後の新カリキュラムに於いて以下のようの変更、附加及び削減が見られる。①学部《学類科目(選修)及び専攻》1965年度以前の計92単位(うち必修62、選択10)から、英修計82単位(うち必修62、選択20)への変更、内容的には講義の実施が計られ(聖書学、聖書神学、歴史)そのうち、今年度までの要修制の実施は研究体制の推進及び専攻制の傾向として特に注目する必要がある。②院《1967年度生より専攻選択する専攻計50単位(甲20、乙30)から、甲乙類計42単位(甲16、乙26)への変更、この変更は次の二案に基づくと考えられる。即ち甲類中の聖書神学2科目の選択制、丁史神学部内の整理配置、特に後者のどれか一つの多様性(現行の乙類中の丁史神学に属する特講類が甲類としてあった)の可整理性に基づき他方では上記の学部にも見られた専攻制の傾向を推し進めたいと考える。(参照 66年度生までの履修方法「甲類科目中から専攻科目一科目以上、合計20単位を選択履修し、更に甲乙類科目中から、30単位以上を選択履修すること」より、67年度生以降は「甲類科目Kフリマは自己の専攻から2科目、他の専攻から各一科目以上、---16単位以上を履修する」と変更される。以上の66~67年よりの新カリキュラムは教教会の標準とする神学教育と年別研究面の不統一を正すこと、此処に専攻からの履修を厚したという同志社大学神学教育、即ち「専攻専攻の教育的自由主義」としてのアプローチの神学形成されたかに見える。併し、この向うのカリキュラムの変更は、基本的には、同志社大学という大学の中心の一学部としての神学部と、他方では「日本基督教母会認可神学校の一つとしての神学部」という二重の制約に規定されていると考えられ、その中での「神学部共同体」の中心的役割とシマの教教会(65年度発布された同志社大学における神学教育)の「神学部共同体その8)の両天祥式が上記の新カリキュラムとして登場した。かかる視座は特に院での単位総数削減の単独の現われ、他研究科との比較論的現象(研究科としての立前の堅持)での、伝道者養成の為の知識の積込みを阻害しない程度、50単位制から40単位制への削減に見られると考えられる。更に根本的には、形式的に学生に対して各自の自覚性と良心を生かして神学する様式計り、選択科目を削り、必修科目を少なくする、体制を備えよとする。内容的には19世紀の神学を分法を踏襲し、聖書、丁史、経典、実践の諸領域

の領域に別科目を組み合わせる技術的総化的性格に宿っている。このことは神学する者の問題意識が神学自体の問題でもあ
るものがあり、極めて便宜の処方でない。一諸学の総合的基礎を提供するかなめとしての役割の神学に自らが歸つ
ていたのであろうか。かかる観点から、就中実践神学部の一連の科目に振り向けねばならない。一連の実践神学（信スールド
ワーク制度、実習A・B）及教化学、教化学特講（補教師の急の準備体制）に於いて神学部が二重の制約、乃至矛盾が最も具
現化されていると見られ、事実、教授会のこれへの心急げ置は、人事移動（深田講師→石井助教）カリキュラム編成の面
で尤も云はる他部門に比し、特に著るしい転変を重ねていると考える。カリキュラムでの礼拝学、教会音楽、農村教化学、農
村社会学特講から産業社会教化学への移行（未だ南講の試みなし）、宗教心理学特講等の新設、南講及び、座講がこれである
他方では四半生の必修であった説教と実習の上院での教化学に務し、又、スールドワークの制度については「神学部カリキ
ュラム第三次案、1965、Sept.」での「スールドワーク制度を再検討し」の項の改良的側面を等因に付されている実
状である。改良的側面については同案の「特に実践神学に於いては、日本の教会の生き残課題を取り上げる様に努める」の項
が現状を徹底されているか疑問であると言わなければならない。更に院での教化学及び教化学特講は、教団、補教師の急の
体制として設置されているのであり（必修）実質的には教会教化学活動の職業的訓練機関とある現状である。（院に昨今の
教化学に於いて現われれば説教による採集方法は、根本的に如何に教会に於いて啓蒙（教化）するかという本質的、現実的
課題を除去した技術的観美への処置方法をいかなか、たとえ考へる。）他別実践神学部の一連の現状は、新カリキュラムで研
究体制の推進、専門制化という学生の研究への自覚性と多々なる幻想と撤しつつ、他方では前提自体が問題とされなければなら
ない。これまでの神学体系、制度、組織の矛盾の露呈化と見なければならぬ。又、この事は院に院カリキュラムについて
述べた際の教授会の論議、即ち、現実的、便宜的方法が実践神学部内に対する処置方法として費められたと考へられる事
とも関連し、こうして学生対策的処置方法はカリキュラムとは違った程度から、即ち、採集金制度の条件の加重附加編入制度
の強化の面でも見られる。（別項）かかる実践神学部内に象徴される神学部の矛盾と、研究体制の強化、一石の埒内別化の中
での特殊神学部の「教会への使命」と甘かさんがための過渡的矛盾とをどうも、現行カリキュラムの中での内容的補充と
つなげようとする試みが考へられる。これに対して我々は次の様な観念を提起しなければならぬと考へる。即ち、現行カ
リキュラム自体が以上のような便宜的方法でもって更には既成の神学体系の区分法領域論に終始している事自体、先ずとつ
て周知されなければならない。過渡的矛盾は実にかかるカリキュラム編成自体に根源的に根ざしているのだから、まさに、神学自
体の問題であると考えなければならぬ。又カリキュラムが単位制度として現出し神学部が「教団認可神学部の一つ」として
ある限り、たとえ過渡的矛盾があるにしても、その矛盾は「史的、思想的現実より見れば避けなければならない、現実的「史的課題
とぬぎに」は論ぜられぬ。具体的には初めにふれた我々の主体的批判的此着神学部斗争総括、および、この間の神学部
の一連の動向の検討がなされなければならない。更に根本的には、これらの二つ観念をカリキュラム編成上の二重の制約に顧み
みしと規定する情況一般の視座に於いて見なければならぬ。

以下

斗争経過

一はじめに

我々の主観的意識はともあれ、此間我々は何となく繰り返してきているのであろうか。隔日のキャンパス内部討論を重ね、理論深
化と自からに対する闘いの自覚が迫られているにもかかわらず、主体的に参加するはずの人員は、討論を重ねる毎に減少して
きている事実は何と物語るているのであろうか。単なる「消耗戦」とか、ユーローを思入りのサロンに墮しているのか見ら
れ得ないのであらうか。乃至は相互の理論的対決なくして「人間不信」による内部崩壊が残り続けているのであるか。乃
至は、毎々、そして結局「コト」と言いつつ、斗わずして、自己満足に終結しているのではないか。我々の奮化にせざる
を憚らざつた（問題の戦斗性を「日常性」の次元に引き下げた）事柄が未だ不徹底ではないだろうか。我々の原初、自覚を
る多くの疑問は、現段階において如何に止揚され得るのであろうか。この段階で、時には切り込み論議をたまたま「論議」
乃至は「権威」を表現形態をどうもこき表わせない、幾多の矛盾を組上り戦止（原初）又動機（二重）に達しつつ、討論（な）を（ン）

立つて単にその政治的側面のみを論じておこうとする論議を振り、二重性を認めるも、訓練施設を行政的組織に置き、海軍部が此の
向の我々の手いに対する評価であろう。従つて一見謙遜な面容の様相は、教授会の政策的次元で感嘆され、教員等も現実主義や内訌
理という極めて政治的内容として自覚をたげなければならぬ。以上の様に我々の現行カリキュラムに対する視点は、この成立
及び歴史的背景における政治的状況をめきにしては論ぜられず、且教授会目下の単位制度としての現行カリキュラムとして
、従つて我々は、これを現行カリキュラム体制内として全体化したければならぬ。

かゝる現行カリキュラム体制内という視点におけるカリキュラムに対する我々の取り組みは、内部討議の様相を以て証せら
れた。こゝでは教授会の論議に従つて様相な意見の潮流を見て行きたい。既に述べた通りに、圓滑に見られる教授会の現行カリ
キュラムに対する取らえ方は、カリキュラムを規定する二重性の矛盾を認めつゝ、しかし現行カリキュラムの運用の技術的
側面においてのみ自己批判をなすことにおいて明白な放棄的責任転嫁、問題放棄をなしていることなければならぬ。もちろん、
この二つの意味する政治的意図は何をもつても詳述しなければならぬ。しかし教授会を標榜し神学するとは何事である
うか。こゝでの矛盾とは、まさしく現行カリキュラム体制自体が更かわるを得ない必然的矛盾の露呈化であり、神学評を規定
する二重性を生み出し、さらにこれらを規定し続けられている現在の状況にあり、このことを無視した矛盾とは単
なる言葉の遊びでしかない。現行カリキュラム意識の中で、その矛盾を小手先の技術的次元の段階で止揚しようとするもの
としてこゝから獲得ない事実的研究者としての自覚を自らから顕現化し、神学しない者は出之行けと言つたあの言ハノ犯罪性
の一石の告発をしなければならぬ理由として提起されなければならぬ。

かういふ諸君や不安定系約を軸として神学、朝鮮、ベトナムの兄弟の血の犠牲の上にある我が国の戦後史の犯罪性を教員は
この種に之より出し自からの苦痛をもつて受けるのであるうかと言わざるを得ない様に、我々の現行カリキュラムに対する
視点は、戦後史において明らか如く自から戦後史における自己否定の検証を内ねねならず、かかる観点からは神学自体が
化を超越したと云ふに提議づけられると、安直に看過され得る事柄ではなく、自からを日中正言は福音的自由主義として性
格付け、その没入テオロギイの学問性、乃至宗教的進歩性を標榜し続けるべきであらぬ。これでもない同志社神学が
平和共存体制といふ代位平和の戦後史の中で自国の発展、及び生産力思想を客観的とは見から補充する後制を果しつつ、建学の
道を述べていることにおいて神学の超越性は今や決定的に我々の前で内訌とされなければならぬ。専門別化と職業訓練判
断という現行カリキュラム体系の内的矛盾は、学問の分業化をもたらし、実践的課題の方向性喪失と密着的に見られ、神学と定
義としてこの体制内化していることを呈示していると言わなければならぬ。体制内学問分業化の過程で神学は技術と化し、道徳す
る者か技術人、知識切り売りの物知りとしか存在せず、自らの学問性自体に對する内りかけ一切放棄される形であるにすぎ
なぬ。我々の現行カリキュラム体系の密着技術的便宜性移を指摘する時、この体制内学問性といふ存在しな
現行カリキュラムの学問性の無様な背景としてあつたのであり、こゝでは神学論としての神学の超越性は、学問の根拠論として
再び提起されなければならぬ。即ち、こゝでも神学の超越性という幻想が、使的總体（植民）から割捨されなければならぬ
。又安直に神学を頂点とする知年争や帝国主義的國家再編における権力争として位置づけられる時、そこにおいて
戦後史を常らく生産力、及養育思想という体制訂持論に自から組みするか、及至はまさしく反体制、及び國家権力争三
つうか、我々に迫る課題と云ふのである。我々の神学と実践の学問の分業化を止揚し、学問の全体化を志向する時、我々に
費らぬがなければならない論議は、反体制的公変革の論議としてあらねばならぬ。学問の根拠論全体化の根拠は、かく
反体制的変革の論議になければならぬ。そのことへの我々の任務は、体制内化した既成学問体系を根絶し、幻想としてあ
る一元的価値としてある文化共同体論の大学制度を崩壊せしめ、学問分業化の中で学問全体化の志向であり、その為の既成制
度、制中単位制度全廢である。我々の具體的行動が、意識指道から全面的カリキュラム体系へと移行せざるを得ない過程は
かかるカリキュラムを頂点とした現行カリキュラム体制も、非否へと移る中で必然的に提起せざるを得ない知年争や不安定系約
争の射程をもたなくはならぬ。こゝのことは政治争と学問内訌の単なる連続ではなく、カリキュラム制度のも
つ内的制約的側面が、歴史的政治過程の中で我々の内訌提起する戦後史の自己否定の検証として取らざるを得ないこと
、現行カリキュラムもつ内的矛盾の露呈化を極めて技術的便宜的に補充し、もつて伝道者養成機関として現存させていること

